

リーフレットのわかりやすさに関する調査

報告書

I. 調査概要

【調査目的】

HPV ワクチンに関するリーフレット内容の理解度合を把握し、理解できなかった部分とその要因を把握する。また、接種を判断する時の判断材料になっているかも把握する。

【調査課題】

調査課題は以下の 2 点である。

- ① 接種対象年齢の女子およびその母親の HPV ワクチンに関する認知の有無、認知内容を把握する。
- ② 接種対象年齢の女子およびその母親のリーフレット内容の理解度合、理解困難箇所を明らかにする。

【調査方法】

- ・120 分のグループインタビュー
- ・接種対象年齢（12 歳～16 歳）の女子とその母親 5 組を 1 グループとする。
- ・母親と子どもは途中入れ替えを行い、親子別々で聴取する。

【調査対象者】

- ・対象年齢の女子とその母親
- ・HPV ワクチンについて「知っている」「少し知っている」
- ・対象年齢の女子に対し、「接種をしたいと思っているが、まだ接種をしていない」「接種をしたいと思っ
ていないが、今後検討したい」「情報がわからないことが多いため、決めかねている」人
- ・母親の年齢不問
- ・母親および家族に医師等医療関係従事者、調査会社・マスコミ関係従事者がいる場合、対象者から除く

【調査日時】

2018 年 11 月 4 日

- ① 10:30～12:30 小 6～中 2 の女子とその母親
- ② 13:30～15:30 中 2～高 1 の女子とその母親

【調査会場】

インタビュールーム B-1（港区南青山）

II. 調査結果詳細

1) HPVワクチン認知状況

- 母親の HPV ワクチンに関する認知と認知内容は、「聞いたことがある」のみの人、「ヒトパピローマウイルス」との認識がある人、接種対象年齢や回数の認識を有するレベルまで幅が広い。
- 母親は子宮頸がんの予防のワクチンであること、副反応がニュースになったこと等は認知があり、新聞やテレビのニュースがその主な認知経路となっている。
- 子どもはワクチンの名称、子宮頸がんの予防ワクチンであること等の認知はほとんどなく、母親から「子宮のがん」「別の病気になるかも」程度の話聞いたことがあるという程度にとどまる。
- 母親の中には、子宮頸がんは遊び人が罹患する病というイメージを持っている人が見受けられる。また、子どもの子宮頸がんの知識は年齢問わず、著しく乏しい。

	母親（38～54歳）	子ども（12～16歳女子）
HPVワクチン認知の有無	<ul style="list-style-type: none"> ・ わからない／聞いたことはあるが説明できない（10人中2人） ・ 知っている（10人中8人） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知らない（10人中8人） ・ 若干聞いた（10人中2人）
認知内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヒトパピローマウイルスのこと。 ・ 子宮頸がんを防ぐために打つワクチンで、若い子に打つと有効。 ・ 性交渉をする前、中1から高3になる前に3回接種する。 ・ 副作用（副反応）が出ることもある。 ・ 子宮頸がんはウイルスでなることは知っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子宮のそういうので予防接種を受けるけど、それで逆に子宮の病気になる。（高1） ・ 逆に別の病気になっちゃう。（高1）
認知経路	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新聞 ・ テレビのニュース ・ 通っている婦人科の掲示物／病院のチラシ ・ 区の保健所の掲示物 ・ （第一子が中1の時に来た）区からの案内 ・ タレント（向井亜紀）のドラマ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の授業でヒトパピローマウイルスの話が出た。（中3） ・ 母親からなんとなく聞いた。（中2/高1）
印象・イメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知った当時は性行為で感染するから遊び人になる病気という偏見が強かったと聞いたので、娘ががんになってそういうことを言われたら耐えられないと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子宮頸がんがどのような病気か、わからない。（小6/中1/中2/中3） ・ 子宮頸がんは子宮のがん（中1/高1）
その他の情報と情報源	<ul style="list-style-type: none"> ・ ママ友と打つかどうかラインで会話をした。 ・ 友達のお姉さんが受けて、何も出なかったがすぐ腫れたと聞いた。 ・ 上の娘（現高1）の時に市の健康センターに行ったが、高校生までまだあるからよく考えてと言われ、友達にも聞いてもらったら40,50人のうち1人しか受けていなかった。 ・ 3回打つことは自分でスマホで調べた。 ・ 新聞が一番詳しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワクチンや子宮頸がんのことは友達とは話さない。（中2） ・ 母親以外からは聞いたことはない。（ほぼ全員）

2) ワクチン接種について

- 娘の子宮頸がんを予防したいという意向は高いと言えるものの、リーフレット閲読前のワクチン接種意向が高い母親は見受けられない。その理由は、副反応の情報や副反応を起こしている接種対象年齢の人の映像を見聞きしたことで、自分の子どもには怖くて打てないという気持ちが働いていると思われる。
- 周囲が受け始め、安心感が増せば接種させるとの意見も聞かれる。

	母親（38～54歳）	子ども（12～16歳女子）
リーフレット認知の有無	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員なし 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員なし
ワクチン接種の有無	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第一子（現大1）に接種（1人） ・ 第一子（現高1）が中2の時に受けようと思ったが、受けていない。 ・ 現対象年齢の女子には接種していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員なし
現在のワクチン接種の意向	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副作用の話が出たのでまだ打っていない。 ・ テレビで副作用の出た方のインタビューを見て、怖いと思った。 ・ 予防できるなら予防したいが、副作用のどの何%かの部類に入ったらどうしようと揺れ動いている。 ・ 周りがやり始めて安心できらやる。 ・ 良かれと思って受けてもその生活を壊してしまうなら、まだがんになったほうがましかなと思い、怖くて受けられない。 ・ 予防できるならと思ったが、自己責任と言われると怖くて今は受けさせていない。 	

2) リーフレット評価

① 「HPVワクチンの接種を検討しているお子様と保護者の方へ」

※発言のあった記載場所と合わせて発言を母親と子どもとに色分けした。

□ …母親の評価

□ …子どもの評価

HPV ワクチンの接種を検討している お子様と保護者の方へ

ワクチンの「意義・効果」と「接種後に起こりえる症状」について確認し、検討してください。

ワクチン接種の「意義・効果」

子宮けいがんの主な原因ウイルスの感染を防ぎます

- 子宮けいがんの原因は、性的接触によって感染するヒトパピローマウイルス (HPV) です。そのため、接種してウイルスの感染を防ぐことで、子宮けいがんを予防できると考えられています。

子宮けいがんの進行と2つの予防法

図はわかりづらい。

予防法①と②が一連の流れなのかわかりづらい (高1)

「前がん病変」を知らない人が多いと思う。

HPVワクチンは新しいワクチンのため、子宮けいがんそのものを予防する効果は、現時点ではまだ証明されていません。しかし、HPVの感染や子宮けい部の前がん病変(がんになる一歩手前の状態)を予防する効果は確認されています。子宮けいがんのほとんどは前がん病変を経由して発生することをふまえますと、子宮けいがんを予防することが期待されます。海外の疫学調査では、HPV ワクチンの導入により、導入前後で、HPVの感染率や子宮けい部の前がん病変が減少したとの報告があります。

現在使用されている HPV ワクチンは、子宮けいがんの原因の50～70%¹⁾を占める2つのタイプ(HPV16型と18型)のウイルスの感染を防ぎます。

HPVに感染しても多くの場合は自然に排除されますが、感染が続くと、その一部が前がん病変になり、さらにその一部ががんになります。また、HPVの感染は、一生のうち何度も起こります。

HPVは広くまん延しているウイルスであり、我が国では年間約10,000人が子宮けいがんにかかり、それにより約2,700人がなくなれるなど重大な疾患となっています。

わが国における、HPV ワクチンの効果推計(生涯累積リスクによる推計)
HPV ワクチンの接種により、10万人あたり859～595人が子宮けいがんになることを回避でき、また、10万人あたり209～144人が子宮けいがんによる死亡を回避でき、と期待されます。

HPVワクチンは、積極的におすすめすることを一時的にやめています

厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

ワクチンを接種したから「ほとんど自然消滅」するのか、接種しなくても自然消滅するのかを知りたい。

ワクチンを接種しないとどうなるのかと思った。

「前がん病変」を知らない人が多いと思う。

良いことが書いてあるのだから、大きな字にすればいい

「疫学調査」ってなに？ (小6 / 中3)

受けるのは1回でいいのか、なんかも起こり得るなら何年か後にまたワクチンを受けたほうがいいのか？

亡くなった方が打っていたのか、打っていなかったのが重要。

10万人の母数にしては数が少ないか？
10万人あたり何人がなるのかを知りたい。

まだ受けないほうが
いいだと思った。

受けてほしいのか、ほしくないのか、この言葉がなければ迷わない。
何かがあるから「一時的にやめています」なのだから、親心を不安にする。

この一文がなければ、積極的に受けようと思ひ、真剣になる。

検討するのはあなたですと言っておいて、この一文があると「まだいいかな」と思ってしまう。

他にも型があるのかわからない。

何人中の1万人？

「生涯累計リスク」の意味がわからない (小6)

「期待されます」とあるが、統計をとっているのか？

検討している人が読むものなら「やめよう」となるから書かないほうがいい。(高1)

なぜ一時的に止めているか書いてあるほうがわかりやすい。(中2)

選ぶことができるのか？ (中3)

自分たちで選ぶのか？

副反応がどうい反応か、わからない (小6)
「疼痛」や「掻痒」など知らない名前が結構ある (中3/高1)

本当に重い大変なことになると思うので、もうちょっと大きく書いたほうがいい (中3)

隠さないでほしい。

自分で調べられるから病名は書いてあったほうがいい。

救済制度がどういことなのかかわからない (中1/中3)

どっちのワクチンを受けさせてくれるの？

2種類ある意図を知りたい。

「まれ」とはどれくらいか？

病名が書いてあると一時的なのか一生治らないのかわからず、怖い。

病名は隠したほうがいい。

「副反応」を聞いたことがない (高1)

どれくらいが「重篤」なのか？

救済制度の対象になるのが何が書いてない。

誰が判断するのか？

救済措置に行きつのか、不安を呼び覚ます文章だと思う。

ワクチン接種後に起こりえる症状

主なものは、接種部位の痛みやはれです。^{2) 3)}

- HPVワクチン接種後にみられる主な症状には、接種部位の痛みやはれ、赤みがあります。
- HPVワクチンにはサーバリックス®とガーダシル®の2種類があります。
- 一定の頻度で発生する副反応については、ワクチンの添付文書に下表のとおり記載されています。

発生頻度	ワクチン：サーバリックス®	ワクチン：ガーダシル®
50%以上	疼痛・発赤・腫脹、夜間咳	疼痛
10～50%以上	掻痒、腰痛、筋痛・関節痛、頭痛など	腫脹、紅斑
1～10%未満	疲労感、めまい、発熱など	掻痒・出血・不快感、頭痛、発熱
1%未満	注射部位の知覚異常、痒感、全身の疲労	頭痛、四肢痛、筋骨格硬直、腰痛・下痢
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症など	疲労・倦怠感、失神、筋痛・関節痛、嘔吐など

- その他、接種部位のかゆみや出血、不快感のほか、疲労感や頭痛、腰痛、筋肉や関節の痛み、じんましん、めまいなども報告されています。

まれですが重い症状が報告されています。

- 呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー(アナフィラキシー)
- 手足の力が入りにくいなどの症状(ギラン・バレー症候群という末梢神経の病気)
- 頭痛、嘔吐、意識の低下などの症状(急性散在性脳脊髄炎(ADEM)という脳などの神経の病気)

副反応疑い報告の数と救済制度の対象となった方の数

副反応疑い報告

接種が原因と証明されていなくても、接種後に起こった健康状態の異常について副反応疑いとして報告された場合は、審議会(ワクチンに関する専門家の会)において一定期間ごとに、報告された方の概要をもとに頻度等を確認し、安全性に関する定期的な評価を継続して実施しています。

平成29(2017)年8月末までに報告された副反応疑いの総報告数は3,130人(10万人あたり92.1人^{※1)}で、うち医師又は企業が重篤と判断した報告数は1,784人(10万人あたり52.5人)です。ただし、接種後短期間で回復した失神等も含んだ数です。

※1 全報告数は報告開始から、発表開始時は平成22(2010)年11月26日からの報告
 ※2 独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)より
 ※3 接種スケジュールを仮定し、これまでの1人あたりの平均接種回数を2.7回と仮定しては算出数より推計した接種者数340万人(サーバリックス®259万人、ガーダシル®81万人)を分母として10万人あたりの頻度を算出

救済制度

我が国の従来からの救済制度の基本的な考え方「厳密な医学的な因果関係までは必要とせず、接種後の症状が予防接種によって起こることを否定できない場合も救済の対象とする」にそって、救済の審査を実施しています。

平成29(2017)年9月末までにHPVワクチン接種との因果関係が否定できないとして救済制度の対象となった方^{※1)}は、予防接種法に基づく救済の対象者が審査した計36人中、21人、PMDA法^{※2)}に基づく救済の対象者が、審査した計436人中、274人となっています。合計すると472人中、295人(10万人あたり8.68人^{※3)}です。

※1 ワクチン接種に伴って一般的に起こりえる副反応等以外の特定な身体症状以外の特定な人数
 ※2 独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)より
 ※3 接種スケジュールを仮定し、これまでの1人あたりの平均接種回数を2.7回と仮定しては算出数より推計した接種者数340万人(サーバリックス®259万人、ガーダシル®81万人)を分母として10万人あたりの頻度を算出

痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について

- ワクチンを接種した後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動(動かそうと思っていないのに体の一部勝手に動いてしまうこと)などを中心とする多様な症状が起きたことが副反応疑い報告により報告されています。この症状は「機能的な身体症状」(向うかの身体症状があり、その身体症状に合致する検査上の異常や身体所見が見つからず、原因が特定できない状態)であると考えられています。ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方はこれらの状態が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください。なお、HPVワクチン接種後の局所の疼痛や不安等が機能的な身体症状をおこすきっかけとなったことは否定できないが、接種後1か月以上経過してから発症している人は、接種との因果関係を疑う根拠に乏しいと専門家によって評価されています。また、HPVワクチン接種歴のない方においても、HPVワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在したことが明らかとなっています。

国としてどんなサポートしてくれるのか謎。例が書いてあれば安心感に繋がる。

人数を書く必要はないのではないかと (中2)

重要な部分だからもうちょっと目立たせたほうがいい。

ワクチン接種から、その後の流れ (留意点)

保護者が気をつけること お子様の体調をよく見てあげてください

当日

医療機関での留意点

- 失神による転倒に備え、接種後30分ほどは座らせて様子を見てください。
 - 注射に対する恐怖心などをきっかけに、接種後に失神することがあります。
 - 転倒による怪けを防ぐため、接種後30分ほどは、背もたれのあるいすなど体を預けられる場所に座らせて様子を見てください。

接種当日の留意点

- 激しい運動は避けてください。
 - 接種当日は、激しい運動は避けてください。
 - 接種部位を清潔にして、体調に変化がないか気をつけて見てください。

気になる症状が現れたとき

すぐに医師にご相談ください

- 注射料を射した直後から、強い痛みやしびれを感じた場合は、すぐに医師にお伝えください。
- 接種後、気になる症状や体調変化が現れたら、すぐに医師にご相談ください。
- 1回目の接種後に気になる症状が現れた場合は、2回目以降の接種を控えることができます。
- HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関を全国に設置しています。症状が生じた際は、接種を行った医師又はかかりつけの医師にご相談のうえ、協力医療機関の受診をご検討ください。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou28/medical_institution/dl/kyoyroku.pdf

副作用によって医療機関での治療が必要になったとき (医療費がかかったとき等) お住まいの市区町村へご相談ください

- 副作用によって、医療機関での治療が必要になったり、生活に影響が出るような障害が残るなどの健康被害が生じた場合は、法律に基づく救済が受けられます。お住まいの市区町村の予防接種担当へご相談ください。
※ 救済を受けるには、接種事業者が予防接種によって生じたことが認められるか、あるいは別の原因によるものかを、専門機関から検定される必要があります。認定される場合があります。

接種後に生じた症状によって受診する医療機関や、日常生活のこと、医療費のこと等で困ったことがあったとき

- お住まいの都道府県に設置された相談窓口にご相談ください。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou28/madoguchi/01/151116_01.pdf

20歳

お子様が20歳になったとき

ワクチンを接種した方も、子宮けいがん検診を定期的に受けてください

- HPVワクチンは、全てのタイプのHPVの感染を予防するものではありません。
- ワクチンで感染を防げないHPVが原因の子宮けいがんを予防するには、子宮けいがん検診を受診して、がんになる前のがん細胞を早期発見する必要があります。
- ワクチンを接種したお子様も、20歳になったら2年に1回は必ず子宮けいがん検診を受けてください。

HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に関する協力医療機関を全国に設置しています。

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou28/medical_institution/dl/kyoyroku.pdf
協力医療機関の受診は接種を行った医師又はかかりつけの医師にご相談ください。

選択肢があることをもう少し大きく謳ってもいい

「医療機関」がよくわからない (中1)

重要なので、線を引いたほうがいい (中3)


このリーフレットに書かれていた内容について、もう一度チェックしてみてください。

CHECK! 接種前に確認を


- 子宮けいがんの一部 (HPV16型と18型によるもの) は、HPVワクチン接種により予防できると考えられている
- HPVワクチンの接種後に起こりえる症状としては、痛みやしびれ、動かしにくさなどがある
- HPVワクチンを接種しても、20歳になったら子宮けいがん検診も必要である

感染症・予防接種相談窓口

HPVワクチンを含む予防接種、インフルエンザ、性感染症、その他感染症全般についての相談にお応えします。

厚生省 感染症・予防接種相談窓口 検索 

接種後は、体調に変化がないか十分気をつけ、心配な症状が出た場合は、迷わずに相談してください。

厚生労働省のホームページでは、HPVワクチンに関する情報をご案内しています。 厚生省 子宮けいがん 検索 

厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

平成30(2018)年1月

特にわかりづらい箇所はない

特にわかりづらい箇所はない

- リーフレット「HPV ワクチンの接種を検討しているお子様と保護者の方へ」を読んだ印象として、母親からは「副作用が重い」「母親としての責任を感じる」「曖昧」「もっと知りたくなる」といった声が聞かれる。
- 母親がこのリーフレットから読み取ったことは、「ワクチンを打っても子宮頸がんは100%かからなくなるわけではない」「副作用があるがワクチンを受けるなら自己責任で」「各家庭で判断して欲しいと言っている」「打って終わりではなく、その後の検診などのケアが大事」など。なかには、「遠まわしに『ワクチンを打ちましょう』と言っている」と感じている人もいる。
- 子どもたちが読み取ったことは、「必ずではないが、起こり得ること」「打ったほうが子宮頸がんは予防できるが副作用が出ることもある」「接種後の定期検診が必要」「接種後に何かあれば早く手当てすることが必要」「家ごとに受ける、受けないの判断をする」など、概ね母親と同じ。

	母親（38～54歳）	子ども（12～16歳女子）
印象	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副作用がかなり書いてあるなという印象。 ・ 積極的に接種してくださいとは言えないが、自己責任でよく考えて打つというあいまいな感じがする。 ・ それほど警戒する副作用でもないのかなと思いつつも、打ったことを後悔するくらい重くしかかる気がする。 ・ 母親の責任をすごく感じる。 ・ 7割くらい打たなくていいと言われていた感じがする。 ・ 打ったら軽く済むのか、済むなら数値も載せてほしい。 ・ 海外での実績はどうなのか、知りたいことが出てくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ （副反応の）病名で、苦しくなるんだと思う。（小6）
何が伝わるか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 打って絶対にかからないわけではなく、副反応があるということが言いたい。 ・ 打ったからと言って安心ではない、100%ではないということ。 ・ 副作用があるが、受けるなら自己責任、打つかどうかはお任せします、と取れる。 ・ 遠回しに受けてほしいと言っているのではないかと。 ・ ご家庭で判断してくださいという感じがする。 ・ 国的には子宮頸がんを減らすために、打ったほうがいいが、自己責任ですよと言いたいのだと思う。 ・ 打ちっぱなしではなく、検診を受けるなどその後のケアが必要ということが言いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 打った後に、必ずではないが、起こり得る可能性のことが書いてある。（中2） ・ 打ったほうが予防はできるけれど、自分の体に痛みが出たり、どんなことが起きるかを書いてある。（小6） ・ 副作用が出たり、障害が起こったりするから、インフルエンザみたいに勧めたりできない、個人の判断が必要。（中2） ・ 家ごとに受ける、受けない、を判断する。（中1） ・ 副作用があるからもう一度しっかり子宮頸がんのことを知っておいてほしいということ。（小6） ・ むやみに接種するのはやめたほうがいいと書いてある。（中2） ・ 子宮頸がんは本当にならないわけではないからその後も定期的な検診が必要。（中3） ・ 打ったからと言って必ずかからないわけではなく、気をつけたほうがいいと書いてある。（高1） ・ 接種した後にほかに症状が出たら早く手当てをすることが重要。（高1）

② 「HPVワクチンを受けるお子様と保護者の方へ」

HPVワクチンを受ける お子様と保護者の方へ

ワクチンを受けた後は、体調に変化がないか十分に注意してください。

もしも、気になる体調変化があった場合は、このリーフレットを参考に、医師等に相談してください。



当日 ワクチンを受けた後30分ほどは座って様子をみてください。^{*}

※極度の緊張や、強い痛みをきっかけに、生理的な反応として、脈拍がゆっくりになったり、血圧が下がったり、時に気を失うことがあります(この反応を、血管迷走神経反射と言います)。通常、横になって休めば自然に回復しますが、この時に、倒れてケガをすることがあります。

ワクチンを受けた日は はげしい運動はやめてください。

気になる症状が出たときは すぐにお医者さんや周りの大人に相談してください。

ワクチン接種後に、もしも気になる症状が出てきた場合は、迷わず、すぐに医師等に相談しましょう。心配される症状を次頁に掲載していますので、参考にしてください。

↓ 数日後から経過観察 ↓

HPVワクチンは、積極的におすすめすることを一時的にやめています



特にわかりづらい箇所はない

特にわかりづらい箇所はない

以下のような症状が出たら、ワクチンを受けたことを伝えお医者さんや周りの大人に相談してください。

- 注射の針を刺したときに強い痛みやしびれを感じた
- ワクチンを受けた後に、注射した部分以外のところで痛みや手足のしびれ・ふるえなど気になる症状や体の変化がある

起こるかもしれない体の変化:

よく起こるもの	● 注射した部分の痛み、腫れ、赤み、かゆみ、出血、不快感 ● 疲れた感じ、頭痛、腰痛、筋肉や関節の痛み、じんましん、めまい
まれに起こるもの	● 緊張や不安などをきっかけに気を失う

まれですが、重い症状が出る場合があります。

- 呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー（アナフィラキシー）
- 手足の力が入りにくいなどの症状（ギラン・バレー症候群という末梢神経の病気）
- 嘔吐、嘔吐、意識の低下などの症状（急性散在性脳脊髄炎（ADEM）という脳などの神経の病気）

痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について

● ワクチンを接種した後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動（動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと）などを中心とする多様な症状が起きたことが副反応疑い報告により報告されています。この症状は機能的な身体症状（何らかの身体症状があり、その身体症状に合致する検査上の異常や身体所見が見つからず、原因が特定できない状態）であると考えられています。ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方はこれらの状態が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください。なお、HPVワクチン接種後の局所の疼痛や不安等が機能的な身体症状をおこすきっかけとなったことは否定できないが、接種後1か月以上経過してから発症している人は、接種との因果関係を疑う根拠に乏しい」と専門家によって評価されています。また、HPVワクチン接種後のない方においても、HPVワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在したことが明らかになっています。

HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に関する協力医療機関を全国に設置しています。

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou28/medical_institution/dl/Ayoyoroku.pdf

協力医療機関の受診は接種を行った医師又はかかりつけの医師にご相談ください。

特にわかりづらい箇所はない

特にわかりづらい箇所はない

副反応疑い報告の数と救済制度の対象となった方の数

副反応疑い報告

接種が原因と証明されていなくても、接種後に起こった健康状態の異常について副反応疑いとして報告された方については、審議会(ワクチンに関する専門家の会議)において一定期間ごとに、報告された方の概要をもとに臨床等を検証し、安全性に関する定期的な評価を継続して実施しています。平成29(2017)年8月末までに報告された副反応疑いの総報告数は3,130人(10万人あたり92.1人^(*))で、うち医師又は企業が重篤と判断した報告数は1,784人(10万人あたり52.5人)です。ただし、接種後短期間で回復した失神等も含んだ数です。

(*) 企業報告は審議会から、医療機関報告は平成29(2017)年11月26日からの報告
 副反応スクリーニング実施し、これまで1人あたり10回接種回数を2回に限定して接種回数より増した接種者数340万人(サーベイランス229万人、ガーゼ付61万人)を
 対象として10万人あたり92.1人の報告数です。

救済制度

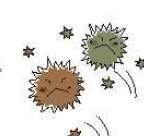
我が国の従来からの救済制度の基本的な考え方「厳密な医学的な因果関係までは必要とせず、接種後の症状が予防接種によって起こることを否定できない場合も救済の対象とする」にそって、救済の審査を実施しています。平成29(2017)年9月末までにHPVワクチン接種との因果関係が否定できないとして救済制度の対象となった方^(*)は、予防接種法に基づく救済の対象者が、審査した計36人中、21人、PMDA法^(**)に基づく救済の対象者が、審査した計436人中、274人となっています。合計すると472人中、295人(10万人あたり8.68人^(**))です。

(*) ワクチン接種に伴って一部に起こる過敏性発疹や発熱などの軽微な副作用は対象外
 (**) 厚生労働省が実施する救済制度(救済法)による救済
 (**) 副反応スクリーニング実施し、これまで1人あたり10回接種回数を2回に限定して接種回数より増した接種者数340万人(サーベイランス229万人、ガーゼ付61万人)を
 対象として10万人あたり8.68人の報告数です。

HPVワクチンとはどんなきめ?

子宮けいがんの原因となるウイルスが感染するのを防ぎます

- 子宮けいがんの原因は感染経路によって感染するヒトパピローマウイルス(HPV)です。そのため、ワクチンを受けてウイルスの感染を防げば、子宮けいがんの一部(16型と18型のHPVの感染による子宮けいがん)を防ぐことができますと考えられています。
- いま使われているワクチンは、子宮けいがんの50～70%の原因となる2つのタイプ(16型と18型)のHPVの感染を防ぎます。
- HPVに感染しても多くの場合は自然に排除されますが、感染が長く続くと、その一部ががん(子宮けいがん)になり、さらにその一部ががんになります。また、HPVの感染は、一生のうち何度もおこります。
- HPVは広くまん延しているウイルスであり、我が国では年間約10,000人が子宮けいがんになり、それにより約2,700人が亡くなるなど重大な疾患となっています。
- わが国における、HPVワクチンの効果的予防(感染率低下)による(推定)HPVワクチンの接種により、10万人あたり859～595人が子宮けいがんになることを回避でき、また、10万人あたり209～144人が子宮けいがんによる死亡を回避できると期待されます。



「生涯累積リスク」の意味がわからない

なぜ10万人なのか(小6)

ワクチンを受けた人も、20歳を過ぎたら2年に1回は必ず検診を受けてください。ワクチンで感染を防げないタイプのウイルスがあります。そのためワクチンを受けても、子宮けいがん検診は必要です。

このリーフレットに書かれていた内容について、もう一度チェックしてみてください。

- ✓ CHECK!**
- 子宮けいがんの一部(HPV16型と18型によるもの)は、HPVワクチン接種により予防できると考えられている
 - HPVワクチンの接種後に起こりえる症状としては、痛みやしびれ、動かしにくさなどがある
 - HPVワクチンを接種しても、20歳になったら子宮けいがん検診も必要である

不安や疑問があるとき、困ったことがあったとき

お住まいの都道府県に設置された相談窓口にご相談ください。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/madoguchi/dl/151116_01.pdf

感染症・予防接種相談窓口

HPVワクチンを含む予防接種、インフルエンザ、性感染症、その他感染症全般についての相談にお応えします。

厚生労働省 感染症・予防接種相談窓口 検索

厚生労働省のホームページでは、HPVワクチンに関する情報をご案内しています。

厚生労働省 子宮けいがん 検索

特にわかりづらい箇所はない

特にわかりづらい箇所はない



- リーフレット「HPV ワクチンを受けるお子様と保護者の方へ」を読んだ印象として、母親からは「わからないことがまだある」「打つことを考える」といった声が聞かれる一方で、受けても大丈夫という印象を受けた人も見受けられる。
- 子どもは、「副作用が怖い」「学校や部活に影響が出たら嫌」「将来、やりたいこと、なりたいものになれないのが怖い」など副反応への怖さが増している様子がうかがえる。
- 母親がこのリーフレットから読み取ったことは、「よく理解し、考えてからうけること」「受けた後の検診を受けることが大事」「何かあったら早く言って欲しい」など。
- 子どもはこのリーフレットは注意喚起のリーフレットとの認識である様子。

	母親（38～54 歳）	子ども（12～16 歳女子）
印象	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「まれですが・・・」と事実が書いてあると（副反応に）なってもしかたない、と受け取らないといけないかなと思う。 ・ 何歳からの人を対象にしているのか、日本だけのデータなのか、海外もなのかわからない。 ・ 打つと決めて行って、副反応がこれだけ出ると読んだら打つのを考える。 ・ 「受けると決めたからには大丈夫ですよ」「でも事実を読んでくださいね」という印象を受け、読むと前向きになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副作用が多すぎてどれかしらになる気がして、ちょっと怖い。（中2） ・ 副作用で部活や学校に影響が出たら嫌だなと思う。（中1） ・ 副反応が起こると普通には生活できないと思い、怖いと思う。（中1） ・ 子宮頸がんにならなくてもほかの反応が起こったら自分のやりたいこととか将来なりたいことができなくなると怖いから止めておこうと思った。（小6） ・ 打った後の症状が怖いから、決めるにも決められない。（小6） ・ 全体的に重要なところが強調されていないので、ひと工夫あってもいいと思う。（中3）
何が伝わるか	<ul style="list-style-type: none"> ・ よく理解して、自分たちでよく考えてから受けてくださいということを伝えている。 ・ 打って何かあったらとにかく早く言ってくれと言われている感じがする。 ・ 自己責任だから救済制度を使うなり、対処してくださいという注意喚起。 ・ 受けたからと言って完璧ではないから検診も受けましようと言いたい。 ・ 受けた後の体調変化には注意しよう伝えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 注意事項が書いてある。（小6）

3) リーフレットの役割 (判断する材料になっているか)

- 2種のリーフレットが判断する材料となっているか否かは人によって異なるものの、受けないほうが良いと判断する材料になった母親、子どもが目立つ。
- 母親、子ども問わず、「ワクチンではなく定期検診のほうが良いと思った」「副作用が怖い」「リスクがある今はまだやめておこう」といった反応が見受けられる。
- リーフレットを読んでも判断がつかない要因として、母親からは「情報が足りない」「安全性に欠ける」といった声が聞かれ、子どもからは加えて人から説明してほしいとの声が聞かれる。

	母親 (38~54 歳)	子ども (12~16 歳女子)
相談する相手 話を聞く相手	<ul style="list-style-type: none"> ・ かかりつけ医 ・ 医者 ・ 保健所/保健師 ・ 夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お母さん (全員) ・ 病院の先生 (中 2) ・ 学校の保健の先生 (小 6)
リーフレットは打つ、打たないの判断材料になっているか	<p>判断材料になっている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 防げるのが 16 型と 18 型の 2 タイプのウイルスのみとは知らなかったで、それなら定期検診のほうが良いのかなと思うようになった。 ・ 30~50%は違うウイルスからかかるということだと思ひ、判断材料になる。 ・ 子宮頸がんになる可能性はすごく高いわけではないと考えると副反応のほうが怖いと思うようになった。 ・ 1 枚目の図が一番わかりやすく、これを見て、やらなくてもいいかなという気持ちが強くなった。 ・ ワクチンを 3 回打ったら子宮頸がんにはならず、20 歳になって検診を受けなくてもいいと思っていたが、ワクチンを受けても子宮頸がんになるリスクがあり、簡単な予防接種ではないことが分かり、今はやめておこうと考えが変わる資料になっている。 ・ 「ワクチンを受ける・・・」リーフレットでリスクもあるが、事実を隠さずに載せてあり、安心感も受け取れた。 ・ 検診で発見されることより副反応が怖い。 <p>判断材料にならない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワクチンを打った場合と打たずに検診で早期発見した場合と、最終的にどれくらいがんにかかる率が変わることかというデータがあると判断しやすい。 ・ 資料だけで判断するのは怖い。 ・ 一時的にやめているものを受けるのは怖い。 ・ 判断するには情報が足りない。 ・ ワクチンが改良された、違うワクチンになった、より安全性が高いものをつかっているなど書いてあれば接種意向が高まる。 ・ 以前との比較があれば少しは安心する。 	<p>判断材料になっている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副作用が多すぎて、進んでやろうとは思わない。(中 2) ・ 打つてもなる可能性があるなら、定期的に検診に行つたほうが良い。(中 3) ・ たくさんのデメリットがあるとやりたいと思わなくなる。(中 2) <p>判断材料にならない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 打たないで子宮頸がんになった時にどうなるのかも知りたい。(高 1) ・ 打つた時と打たなかった時の悪い状態の比較をしたい。(高 1) ・ 学校の授業などでの説明とこのリーフレットを見て判断できそう。(中 3) ・ 人に説明されると説得力がある。(高 1) ・ 資料だけでは決められない。(中 3)
費用、国からの補助の認知	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知あり 7 人 ・ 高 1 までが無料と言われて早く受けさせようという気持ちにはならない。 ・ 年齢で制限される意味がわからない。 ・ 高 3 や 20 歳まで広げてほしい。 ・ 年齢で区切るのではなく、「(性的接触) 未体験」と書いておけばいい。 	